

# Out Of Bounds アウト・オブ・バウンズ

## Run

ようやく顔を上げた笠松の目の前には、もう黄瀬の姿はなかった。

### 《3ヶ月前》

心地良い日差しが窓ガラスから差し込んでくる。

まだ梅雨には少し早い、しばらく雨が続いていた。

この季節が過ぎて梅雨が終われば暑い夏が来る。

それでも今日はめずらしく朝から晴れていた。

笠松幸男は去年大学を卒業就職してから、ここで一人暮らしを始めていた。

7階建ての賃貸マンションの3階、2LDKと一人にしてはちょっと贅沢な広さ。ここに来てから約1年が過ぎていた。

ようやくこの暮らしにも慣れてきた。

天気が良いというのに朝から何度も窓の外を見ながらソワソワしていた。

「来たかな」

窓の外に、一台の中型トラックが止まった。

トラックから見覚えのある金髪の男が降りてきて、こちらを見上げて微笑んだ。太陽の光さえも彼を祝福しているように見える。

「じゃあ、先輩元気で……」

ドアから吹き込んでくる風は初夏の季節が感じられた。

静かに黄瀬はそう言った。

その響きには明日また会おうとか、そのうち会おうという意味は込められていない。

さようなら意味する別れの言葉

それでも笠松は顔を上げることができずにいた。

バタン

程なくしてドアが閉まる音がした。

どことなく居心地が悪くなって窓から離れて部屋の中に戻った。

ピンポン

程なくドアホンが鳴った。

ドアを開けるとたつた今窓の外で見た男、黄瀬涼太が立っていた。

「先輩、久しぶりッス」

太陽の光が届かない玄関まで光り輝くようであつた爽やかな風が吹き込む。

黄瀬は中学時代にキセキの世代と呼ばれるバスケの天才プレーヤーでその頃から現役モデルをしていた男。

今年大学を卒業して笠松と一緒にこのマンションに住むことになつてた。それは笠松が高校を卒業するときからの約束だった。

だから一人では広すぎたこの部屋も今日からは少しだけ手狭になる予定だ。

「ああ、こっちの部屋でいいよな。といつてもそこしか空けてないけど」

と笠松は久しぶりに会った黄瀬を直視できずに、そそくさと空いている部屋へ案内する。それに対して黄瀬は笑顔のまま

「良issよ」

と引越し屋に荷物を置くように指示を出した。

手慣れた引越し屋は黄瀬の指示通りに荷物を運び入れ、昼頃には配置を全て終えて帰って行った。

「やつとふたりになれたッスね。先輩」

この『せんばい』という響きも久しぶりで、そんなことさえ照れくさくて立ち上がった。

「コーヒーでもいれてくる」

しかし黄瀬はそんな笠松の手首を掴んだ。

「良issよ。久しぶりに会えたのに先輩は嬉しくないんスカ？」

笠松は真つ赤になつたまま仕方なく黄瀬の隣に座つた。

「バカ！いつまで先輩つて呼ぶつもりだよ！」

黄瀬は緩やかに手を離した。

「だって今更なんて呼べばいいスカ？幸男さん？幸男スカ？」

「ああ、もう先輩でいい！やつぱりコーヒーいれてくるから」余計に真つ赤になつてキツチンへ向かった。

戸棚からコーヒーカップを一つ取り出してインスタントコーヒーをいれる。

ドキドキドキドキ・・・

久しぶりに会ったせいか、心臓が外に飛び出しそうなほど音が大きい。

大学を出て社会人生活も1年を過ぎると、高校時代に苦手だった女性とも普通に接することができるようになった。

それなのにどうして黄瀬の前だとこんな風にドキドキするんだ

ろう。

少しでも落ち着くようにとキッチンに立つて鍋でお湯を沸かす。

「先輩ティファール持っていないスか？」

背中から黄瀬の声がして振り返らずに鍋のお湯を見つるたまま

「なんだそれ？」

「えっ？知らないんツスか？お湯がすぐ沸くんツスよ。それがあればわざわざ幸男さんがキッチンなんか来なくても良いじゃないスか。今度一緒に買いに行きましょ。これからは先輩と一緒にから！」

背中から黄瀬は両腕を回してきて、心音が更に早くなった。

知られたくなくて黄瀬の腕を掴んで外そうとするが、彼はもたれかかるようにそのまま頭を笠松の肩に押しつけてきた。

「あ、先輩の匂い。幸男さんと一緒にいられるって実感できて安心するツス」

サラリとした黄瀬の髪、柑橘系のいい香りのする黄瀬のコロン

「俺なんかお前に比べたらただ臭いだけだからやめろ」

黄瀬の頭を軽く押す。

「そんなことないスよ。先輩はいつも清潔なせつけんというかミントみたいな香りがするスよ。舐めたくなる」

と首筋をペロンと舐められて笠松は本気で黄瀬の頭を叩いた。

「やめろ！バカ！」

「あ、それそれ」

と黄瀬は叩かれたのにニッコリと微笑んだ。

「お前やつぱりそういうのが好きなのか？」

ブクブクと鍋のお湯が沸騰するとコーヒーカップに注いだ。

笠松はふたつのカップを持ってリビングのテーブルに置いた。

黄瀬は笠松の後ろからニコニコと着いてきた。

「じゃあとりあえず」

笠松はカップを持ち上げた。

「ようこそ！元氣そうだし相変わらずみてえだから安心した。これからよろしく！」

と言うと、黄瀬も慌ててカップを手にする。

「こつちこそよろしくツス。やっと一緒になれて嬉しいス」

爽やかな笑顔で答える。

ふたりはコーヒーで乾杯をしてお互いの今の状況を話し始めた。

「社会人も楽じゃねえよ。何につけてもノルマばかりで、バスケットよりきついぜ」

「でも先輩って今の会社でバスケットの選手なんツスよね。それでも待遇は変わらないツスか？」

こうして話し始めると高校の時と変わらない。

ごく普通に接することができてどこかホッとした。

「バスケットなんか日本じゃそんなにメジャーなスポーツじゃない

し、逆にあんまりバスケットバスケット言っていると会社の上司から睨まれるところもあるらしい。うちはその点まだ大丈夫だけどな。それよりお前今度映画出演決まったらいいじゃん」

「ああ、あれは脇役だし、でも先輩が気にしてくれて嬉しいツス」  
相変わらずワンコのように尻尾を振って見える黄瀬。

黄瀬は一段と一般にも知られて、世間的にも脚光を浴びている男。笠松は普通のサラリーマンで社会人バスケットをやっていた。

休日はいがいバスケットの練習や試合があるが、今日と明日は片付けの手伝いをするつもりで黄瀬のために空けておいた。

黄瀬も多分忙しい毎日で今日は引越しのために休んだとばかり思っていた。

「これからちよつとその映画の打ち合わせがあつて、出かけないといけないスよ」

だから突然黄瀬がそんなことを言い出してちよつとだけガツカリした。別に一緒にいたからつてどうつてことはないのだけれど・・・

「ああ、お前忙しいんだよな」

「そんなことないスけど、この仕事で暇だちよつとヤバイツスから」

と黄瀬は苦笑する。

それもそうか、サラリーマンとは違って給料が保証されてる訳じ

やねえからな。

「あ、でも一緒に夕飯食いましょ。今日は遅くなるので明日、店予約しておくんで8時に待つててください。店の場所は後でメールで連絡するツスから」

「何もわざわざ外食するほどのことじゃねえし」

黄瀬が笠松の両手を掴んだ。

「ダメツスよ最初が肝心つて言うじゃないツスカ。俺ちゃんとかじめつけないツス」

真剣な黄瀬の瞳を見つめるとついついまた顔が赤くなった。

「わ、わかったから。その手を離せ」

だが黄瀬は笠松の手に唇を押しつけた。

「じゃあ、約束ツスよ」

笠松はまたドキドキと心音が早くなった。

「ああ、必ず行くから」

笠松が約束すると黄瀬はようやく手を離した。

「それじゃあ先輩また」

黄瀬はそう言つて出かけていった。

黄瀬は外出したままその晩は戻つてこなかった。

笠松はせつつかくの休日だがやることも思いつかず、雑誌を手に取

った。黄瀬が表紙のファッション雑誌。ページをめくりながら何気なくまるで別人のような黄瀬を見ていた。

そこに携帯メールの着信音が鳴った。

黄瀬からではなく会社のバスケットメンバーからだった。

「試合のメンバーが急に来られなくなった。せつかくの休みで悪いんだが今から出てこれないか？」

という内容だった。

今からなら黄瀬との約束には充分間に合うはずだ。

笠松はすぐに「今から行く」とメールを返信していた。

暇つぶしには丁度良い。笠松はウェアが入っているバッグを手に入部屋を出た。行きの電車の中で黄瀬からのメールが入った。

約束の店の名前と地図が送られてきた。笠松が向かっている場所からはそれほど遠くなかった。

これなら少しぐらい遅くても間に合うな。

待ち合わせの間に合えば、別に黄瀬に試合に行くことなんかないから連絡する必要もないだろう。会ってからバスケットの話すればいい。笠松は携帯電話をそのままポケットにしまった。

\$

試合会場へ行くとそこには懐かしい顔があった。

「森山じゃねえか」

試合相手の会社はどうやら森山の就職先だったらしい。

「幸男か、久しぶりだな」

ふたりは久しぶりの再会を喜んだ。

「この試合の相手が幸男のチームって聞いて楽しみにしてたんだ」

「そうだったのか。来て良かった」

笠松は森山と試合ができることを喜んだ。

試合はなかなか良い勝負だったが結局笠松のチームが勝った。

「お疲れ！」

「お疲れ」

着替えているとロッカーで森山が声をかけてきた。

「久しぶりだし、これから打ち上げ行かないか？」

「ああ・・・そうだな」

チラッと時計を見てから、黄瀬との待ち合わせにはまだ充分時間があることを確認すると、森山の誘いに頷いた。

素早く着替えを済ませて、会社のメンバーに挨拶をした。

その間に森山は誰かに電話をしていた。

森山と一緒に体育館を出る。

「どう？この頃何か変わったことあった？」